

湖北省仏教寺院訪問記

鎌田茂雄

一九九四年三月下旬、湖北省の寺院訪問の旅に出た。愛知学院大学中国仏教文物考察訪中団の一行は先ず武汉市を訪れた。

武汉市では洪山宝通寺、帰元寺、黃鶴楼などを訪ねた。武汉市からは夜行列車で宜昌に到着、三遊洞、葛州壩、天然塔などを参観、バスで当陽へ移動した。翌日はバスで江陵へ行き、鉄女寺、章華寺などを訪ねた。三月二六日には玉泉寺、万寿宝塔、関帝廟などを見学した。襄樊市では広徳寺、古隆中、鉄仏寺跡、綠影壁、鹿門寺などを参観した。三月二八日はバスで隨州へ行き、大洪山などに登つた。ほんの十日間の旅であり、ゆっくりと調査すること

はできなかつたが、湖北省の有名な寺院は見ることができた。ただし黄梅県の四祖寺、五祖寺の参観は、一九九五年

九月に行く予定になつてゐる江西省の寺院訪問の時にゆづり、今回は行くことができなかつた。

なお、最後に一言申しあげたいことは、この度の訪中団の秘書長を勤められた成河峰雄助教授が本年七月、御逝去なされたことである。湖北省の旅においても、つねに先頭にたたれて、調査や取材をされていた先生の面影は終生忘れることができないものがある。謹んで成河先生の御冥福を御祈りする次第である。

一 武漢市

帰元寺

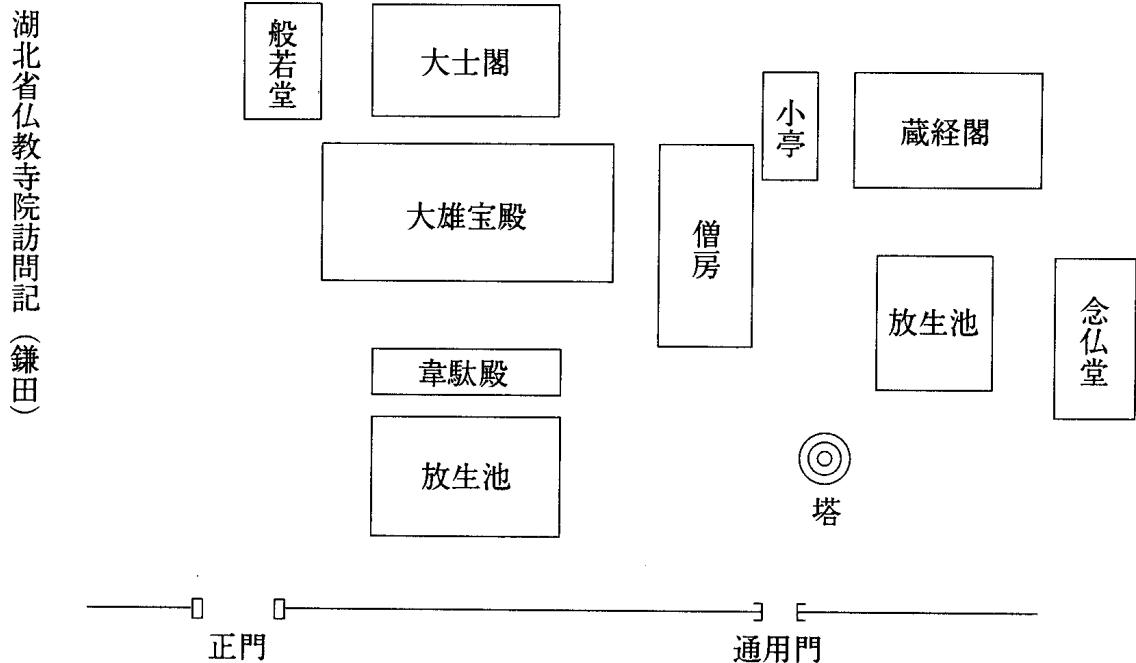
帰元寺は武汉市漢陽区翠微路の西端にあり武漢四大叢林

の一つである。清の順治十五年（一六五八）、仏教の禅宗の五家の一つである曹洞宗の第三十一代仏法禪師の弟子、徳名和尚が主となつて創建したといわれる。この土地はもとは、明代の王章甫の葵花園であつた。徳明、徳昆の二人の兄弟僧が、王章甫が仏教信者であることを知つて募金をして寺を建てたのである。王章甫は喜んでこの兄弟僧を助け、花園を寄贈して寺の地址とした。順治十五年（一六五八）、先ず普同塔を建て、大衆の荼毘を収容し、その後、材料を準備して寺を建て、順治十八年（一六六二）には、大雄宝殿、禪堂、客堂、斎堂などを建てて、初めて叢林としての規模を具えるにいたつた。

帰元禪寺という名称が定められたが普通には帰元寺と呼ばれた。「帰元」という二字は仏經の「方便に多門有り、元に帰れば一路無し」よりとつたもので、すなわち「返本還源、万法帰一」の意味であるといふ。康熙三年（一六六四）、祖堂、韋駄殿、方丈室を増建した。康熙八年（一六六九）には老丈閣と鐘鼓樓が建てられた。康熙十三年（一六七四）には觀音堂、雲水堂、内外の寮舍、寮院、三祖塔院および山門を増修した。清の光緒九年（一八八三）から始めて九年間かかり、羅漢堂が完成した。多くの戦乱を経てしばしば興廢したため、現在の建物は同治三年（一八六四）に建てられたもので、光緒二十一年（一八九五）と民国の時代に、続いて重建されたものである。主な建物は韋駄殿、大雄宝殿、天王殿、地藏王殿、羅漢殿、藏經閣、大士閣などである。別に翠微峰、翠微井、小亭、花壇などがきちんと配置され、その設計もすぐれているが、その配置は、唐宋時代の寺院のように中心線上に対称的に配置されているのではないが、建物がバラバラに配置されているのがかえつてこの園林の特色となつてゐる。

正門の上には「帰元古刹」と書かれた一つの匾額がある。この四字は民国初年（一九一二）の臨時大總統・黎元洪が書いたものである。門前の左右にはそれぞれ樓亭があるが、それが鐘樓と鼓樓である。毎日、朝には鐘を、晩には太鼓によつて周囲の人々に時を知らせてゐるといふ。

韋駄殿の正面の神龕に供せられているのは弥勒仏であり、その神龕の両側にはつぎのような対聯が掛けられている。
慈願常笑、笑天下可笑之人
大肚能容、容世間難容之事



弥勒仏をここに供えているのは、門を入れたところに書かれた「皆大歡喜」の文字と、門の外の放生池の石欄板の上に掘られた図案の中の太陽、楊柳、羊の三陽との関係が一つになつて「入門見喜、出門見三陽」となるのを見て喜ぶのは、「多福多寿、吉祥如意」（福と寿よ多かれ、吉祥は思いのまま）を表すためである。

韋馱菩薩は弥勒菩薩の背後にいるが、大雄宝殿の真ん中にいる釈迦牟尼仏と相対している。韋馱菩薩は頭に金の兜を戴き、身には鎧をつけ、手には降魔杵を持ち威厳に満ちて、いつも釈迦牟尼を守っている。それは「釈迦は韋馱を離れず、韋馱は釈迦を離れず」ということを表しているのである。その両側には次の対聯がある。

玉杵降魔道過一氣
全身護法光映群生

大雄宝殿は寺院の正殿であり、大殿とも称するが、それは宗教儀礼を行う場所でもある。中央に祀られているのは釈迦牟尼の坐像であり、その両側に立つてるのは、釈迦の二人の弟子阿難と迦葉である。仏前の卓の上には五竜戲珠の浮雕が刻まれている。これは一本の三・六メートルの

柏を用いて彫ったものであり、尼さんたち九人が一緒になつて、一年間の歳月を費やして完成させたものであるといふ。

机の上にはさらに一組の浮雕がある。この浮雕は「唐僧取經帰來図」であるが、その構図は精緻で美しく想像力も豊かであり、人物は生き生きと、その姿はそれぞれ異なつてゐる。画面の中には、文武百官が万民傘をさして国樂を奏し、唐の太宗李世民の車上に従つて迎えている姿や、また国家の宴会にはべつて光景や、さらに唐僧（玄奘）の四人の弟子が歩き疲れている姿や、白馬に経をのせて帰國し、西安の大雁塔において經典を翻訳している盛況などが描かれている。

仏前の台の上には五つの供物が置かれている。それは一つの香爐、二つの燭台、「仏日增輝」と「法輪常転」と書かれた板である。釈迦牟尼像の背後には南海觀音（慈航觀音）の一組の雕刻が置かれている。南海の碧波が波立ち、赤い足をした觀音が、大きな海亀の頭の上に独りで立ち、泰然自若として飄々として海を渡り、深く人間の中に入つて苦難を救う場面を表している。また善財童子などの雕像

が体を三〇度、前に傾斜させて立つてゐる。人物は多いが、その並び方がはつきり区別されていながら、しかも全体として渾然として一つになつておらず、活き活きとして乱れることはない。これは清の順治十八年（一六六一）の珍品であるという。今まで三百年余りたつているが少しも破損はない。

大士閣に祀られているのは觀音菩薩であり、その両側には文殊と普賢菩薩と善財童子、童女、巡海夜叉がいる。左側の壁の上に一つの碑刻があり、刻されているのは、唐代の三大人物画家の一人でもっとも優れた觀音を描いた閻立本の描く觀音像と一つの詩である。描かれている絵は、觀音菩薩が普陀山の道場において『普門品』を講じている情景である。

藏經閣は唐の入もや造りにならつて造られた建築で、高さ約二十五メートルの二階建である。

その特色は四柱が高く聳え、四つの鳳凰が太陽に向かい、飛檐と斗栱には五竜が珠に戯むれ、朱色を彩り、金色に輝いてゐるが、これは大藏經をしまつておく所なのである。大量の仏教經典を収蔵しているが、その仏教經典とは竜藏、

続蔵、頻伽蔵、南宋時代の蘇州の磧沙藏、大正藏、真言宗全書などである。そのほか各地の刻経処において刻印された石印、鉛印、影印、碑拓などの単行の仏經などもある。中でも龍藏の經典がもつとも壯觀であり、清代の藏經館の刊本で七、一〇〇卷あるが、その中の一、三三五卷は唐の玄奘が訳したものである。四十八個の大きな立柜（箱）の中には分けておさめられているが、完全にそろい缺本はない稀世の宝である。このほか貝葉經など多くの種類の外國文の印刷された經典がある。

藏經閣の中にはそのほか多くの仏像、仏具、石刻、木雕、牙雕、盜器、碑帖、字画などが収蔵されている。その作品の年代は遠くは北魏から近くは現代に至るまでのものであり、それぞれの風格を具え、内容も豊富であり、目を見はるばかりに美しいものである。

藏經閣の中央に一体の釈迦の玉仏像が飾られているが、それはビルマの芸術家が造つたもので、重さ三屯の白玉石を石刻して造つたものである。仏像の重さは一・五屯あるが、これはビルマから送られた芸術の香り高い珍品であるといわれる。このような大型玉雕の仏像に似たものは中国

ではあまり多くはない。陳列品の中には、一つの「仏」の字があるが、これは清代古稀に達した老人、李舜年の手書きであり、その上、『金剛經』『心經』の全文、五、四三四个字を組み合わせて造つたものである。これらの極めて小さな楷書の字を拡大鏡で見ると、字は明晰であり、書法も整つており、書道の上の珍品といわれる。さらに妙樂和尚が毎朝食指を刺して鮮血と金とを調合して十年かかって書いた『華嚴經』は絶世の宝といわれている。そのほか、多くの名人の碑帖、字画などが収蔵されているが、これらも又、多く得ることができない珍貴な文物であるという。

藏經閣の前は翠微院であり、その門の上の額には「翠微妙境」と書かれている。院内には翠微古泉と翠微池があり、そのそばには念佛堂（三聖堂）がある。この堂が三聖堂といわれるのは堂内に阿彌陀仏と大勢至菩薩と觀音菩薩の一

仏二菩薩、すなわち西方三聖が祀られているからである。

天王殿は寺の南院にある。園内の上には「法相莊嚴」と書かれている。門に入つてさらに開宏門に沿つて進んで行くと、そこが天王殿であり、四天王が祀られている。印度神話の中では、須弥山には四大天王があり、それぞれ東

西南北の一方を護つてゐるといわれ、護世天王、あるいは四大金剛と呼ばれている。中国仏教の説法では、東西南北の四天王の手中に持たれている法器の剣、琴、蛟、塔は、それぞれ風、調、雨、順を分けて管理していることを表したもので、すべて國家安泰、人民安寧をあらわすものであるといふ。

地蔵閣は天王殿の北にある。清の光緒二十六年（一九〇〇）に再建されたもので地蔵菩薩像が祀られている。『大乗大集地蔵十輪經』によれば、「安忍なること大地の如く、靜慮は密藏の如し」と説かれているので地蔵菩薩といわれた。

近年来、寺院の全面修理が進行し、殿宇は面目一新した。四周には五百羅漢像があるが、それらは立つたり座つたり横になつていて、喜怒哀樂を豊かに表現し、それぞれの姿態には特色があり、生活の息吹があり、芸術としても極めて精巧なものであるといわれる。

帰元寺は三百余年余りの歴史があるが、中国の仏教寺院の中ではそれほど古いとはいえないが、知名度は高い。清の道光帝は帰元寺の開山長老、白光、主峰の道業をたたえて玉璽一枚を下賜したが、その篆刻には「勅賜曹洞正宗三十一世白光、主峰祖師之印」と刻されていた。

阿彌陀仏であり、その後ろに立つてゐるのが千手千眼觀音

宝通禪寺

仏であり、最後の一組の中間にいるのが釈迦牟尼仏であり、左側の青い獅子に乗つたのが文殊菩薩であり、右側の白象

宝通禪寺のある洪山は、原名は東山、湖北省武漢市の武昌の大東門外にある。武漢市の三名山の一つである。宋末

に乗つたのが普賢菩薩である。

に隨州で兵乱がおこり、荆湖制置使孟珙が隨州の大洪山から武昌に移った時、隨州大洪山の寺額をこの山に持つてきたため、この山を洪山と呼んだのである。

この山は風景がよく樹木が茂り奇岩怪石に恵まれている。ため、山中には寺院、道觀、閣亭や洞窟、泉井などがある。現在は、宝通寺、法界宮、靈濟塔、興福寺塔、華嚴洞、白竜泉、摩崖石刻などの古跡がある。

宝通禪寺は湖北省武漢市武昌の洪山の南麓にあり、南宋の端平年間（一二三四—一三六）に創建された。隨県の大洪山からこの地に移つたので、もとの名は崇寧万寿禪寺であった。明の成化二十一年（一四八五）、今の名に改めた。現在の建物は清の同治四年から光緒五年（一八六五—一八六九）にかけて建てられたもので、武漢の四大叢林の一つである。

主な建物には山門、放生池、聖僧橋、接引殿、東西の配殿、大雄宝殿、祖師殿、禪堂、鐵仏殿、藏經閣などがあり、保存された文物には宋代に鑄造された「万斤鉄鐘」、明の始めに雕られた一対の石の獅子がある。寺の後ろには洪山の宝塔、法界宮があり、そのほか小亭、屋台、奇石、幽徑

などもあり、みどりの松柏におおわれ、莊嚴、古朴な風致を保ち清泉が流れ幽邃な環境を保つていて。洪山は現在、風景区として開発されているが、宝通禪寺がその風景区の中の宝珠となつていている。

洪山の宝塔は靈濟塔と呼ばれており、宝通禪寺の後ろの山頂の近くに立つていて。記録によると、元代に建築され、幾たびか屋根が修理されたが、清の同治四年（一八六五）に再修された。塔の外壁には元の大德十一年（一三〇七）の塔記が八面にはめこまれていて。塔は七層八面で、高さは約四十三メートル、基壇の幅は約三十七メートル、塔頂の幅は約四メートルある。内部は石で外は煉瓦がはられ、木造の構造を模倣し、下から上に傾斜をつけ、その威勢は強くぬきんでており雲をさえぎり、塔頂から望めると、十里の外までよく見ることができるという。そこで「數峰天外洪山塔」というその高さを讃めた詩が作られたのである。塔の中には階段があり、その階段を登つていくと、塔頂に達する。窓から眺めると周囲の湖や山が見え、武漢市の風景を一望の下に見ることができる。塔の背後の山の上には、洪山八景の「栖霞」「雲霧」等の摩崖石刻があり、塔の下

には華嚴洞、白竜泉などの名勝があり、壯麗な宝塔があたりの景色に彩をそえている。

興福寺塔

興福寺塔は無影塔ともいいうが、もとは洪山東端の山麓にあつたが、一九六三年春に洪山の西南の麓に移して復元したものである。伝説によると、南朝の梁の元帝の時に創建されたといわれるが、塔上に刻された文字から南宋の咸淳六年（一二七〇）に建てられたことがわかる。煉瓦と木造で造られた四層八角の重檐、楼閣式の塔である。高さは一・二五メートル、底部は須弥座となつており、その直径は四・二五メートルある。四面には煉瓦造りの仮りの門があり、その上に仏祖、菩薩、羅漢、力士、供養人などの造像が浮きぼりにされているが、その浮きぼりと刀さばきがすばらしく、変化が多く、その姿は厳肅であり生き生きとしている。

蓮溪寺

蓮溪寺は湖北省武漢市の武昌、大東門の外、七・五キロ

の竜山の上にあり、明代に創建された。清の康熙年間に法融長老が責任者として再建したが、咸豐、同治年間に破壊され、清の光緒十五年（一八八九）、道明和尚が修復し、宣統三年（一九一二）には朝廷から大藏經が下賜された。寺内には樓閣、殿宇が金色に輝き、寺の周りは樹木で覆われ天にもとどくばかりであり、武漢市の四大叢林の一つとされている。

辛亥革命の後にこの寺には華嚴大学が置かれ、『華嚴經』や華嚴教学が教授されていた。華嚴大学の跡は現在、樹木が茂った丘になつていて、寺内には大雄宝殿、弥陀殿、祖堂、禪堂、藏經樓などが

古い建物の面影を残し、屋根が重なるように建つていて、大雄宝殿には中国佛教協会会长趙樸初氏の書である「蓮溪禪寺」と書かれた額がある。大雄宝殿の中央には釈迦佛が置かれその両脇には仏弟子の阿難と迦葉とが立つていて、両側には十八羅漢が飾られ、釈迦佛の背後には觀音菩薩がある。文革の時に破壊されたが一九八五年に修復されたといいう。現在は尼僧の修行道場として立派に復興している。

二 宜昌市

天然塔

天然塔は湖北省宜昌市の東七キロにある。晋の郭璞が建てたといわれているが、清の乾隆五十七年（一七九二）に重修された。塔は煉瓦を積み重ねて造られて八角七層あり、高さは約四二メートルある。各層には檐が造られ、その下は皆斗栱で飾られている。塔の基座は八角形で石雕の八大金剛があり、協力して塔を背負い、その形はきわめて生き生きとしている。

基層の塔門は長江の西に向いていて、石額には「天然塔」の三字が刻されている。門のわくには「一竜戲珠、および雲紋図案が装飾されている。門柱には「玉柱は江干に聳え、巍々とし荆門十二を鎮す。文峰は漢表を凌ぎ、雄たること蜀道の三千に當る」と刻されている。

塔頂に登つて宜昌の港を眺めると、舳艤が相い接し、帆柱は林のようである。江に対する五竜山の五峰は峰を連ねており、その様子は五竜が曲がりくねつて江に臨むようである。朝日が登り始める時、塔の影が逆に江面に映じ、あ

たかも一つの巨大な鋼の鞭が五竜の上におおいかぶさるようであり、そのためまた「鞭、五竜を打つ」とも言われるという。塔の下は雑草におおわれていた。

三 沙市市

章華寺

章華寺は湖北省沙市市の東北にある太師淵にある。元の泰定年間（一三三二四一二七）に建てられた寺であるが、この寺は楚の靈王六年（五三五）に建てられた章華台の址に造られたので、寺の名を章華寺といったのである。山門の匾額には中国仏教協会会長の趙樸初氏が書いた「章華寺」の文字が見える。

もとの章華台の高さは三三メートルあつたといわれるが、現在では小さな丘が寺の背後にあるにすぎない。現存の建物は清代に重修されたものであるが、主な殿宇には、天王殿、韋馱殿、大雄宝殿、藏經樓、方丈室がある。そのほか客堂、僧房、齋堂、禪堂、淨業堂などがある。山門に入ると、右側に鼓樓、左側に鐘樓があり、中央に天王殿がある。天王殿の背後に続いて韋陀殿がある。韋陀殿の前の庭には

楚梅と銀杏がある。この章華台の老梅は、言い伝えによると、楚の靈王の時の遺物であり、今に至つてもなお、老竜よりも年月を経ており、枝葉を繁茂させているという。清の李葆元は「章台古梅」と題する詩を作り、その中で「香凝白雪爭千載、影瘦江南剩一枝」と言つてゐる。庭の後ろにある大雄宝殿の右側には方丈室があり、さらにその右には斎堂がある。左側には大悲殿と客堂がある。大悲殿には觀音菩薩が祀られている。

これらの建物はきわだつて立派であり、裝飾も典雅であり、回廊が櫛の歯のように並び、整然と配置されている。

寺内には清の雍正年間に下賜された一組の『大藏經』と、二体の玉仏、およびその他の珍しい文物が蔵されている。二体のビルマから来た玉仏は方丈室の中にある。蔵經楼は現在、復興中であり、いづれ立派な蔵經楼が出現すると思う。蔵經楼の前の小さな池には蓮の花が咲いていた。

この章華寺の四周の環境はよく整備されており、古い柏樹がおい茂り、寺の建物は清寂幽邃の中に包まれている。大雄宝殿の東には一つの古い井戸があり、伝説によると、楚の靈王の時に掘られたもので、沈香井または澆花井と呼

ばれている。清代の詩人である宗渭は「沈香井」と題する詩の中で「朝、井泉を汲むと甘く、暮、井泉を汲むと冽し」と詠んでゐる。この井戸の水は今に至るまで甘く冷たいのは昔のままである。清の人は井戸に沿つて「沈香古井」という四字を刻したが、はつきりと読みとることができる。史料によると、明の建文帝は、かつてこの寺に遊び、「楚の歌と趙の舞はいづこにか出会わん」と歌つたが、今では寒々として鴉が樹のまわりで鳴いてゐるのを見るだけである。

蔵經楼の左側にある僧房の背後には放生池が造られている。その池の向う側の築山の上に五人の章華寺の和尚の墓塔がある。その墓塔名と示寂の年齢はつぎの如くである。

妙蓮法師塔 一九九〇年 八〇歳

本一法師塔 一九九〇年 六〇歳

淨月法師塔 一九四一年 七六歳

月恒法師塔 一九九〇年 九六歳
道靜法師塔 一九八〇年 八〇歳

鉄女寺

鉄女寺は湖北省江陵市の北隅にあり、もとは鉄女廟と呼ばれた。唐代に始めて建てられた廟であるという。唐宋時代には廟であったが清代になつて寺となつた。文革時代には江陵中学が置かれた。文革の時に破壊されたが八十年代になつて、もとの寺として復興し尼僧が住する寺となつた。

『江陵県志』の記載によると、唐の時代、孫という姓の人

がいたが、その人は鉄を造る監督の任にあつたが、無実の罪で監獄に入つた。二人の娘が父の無実の罪を悲しんで溶鋼爐の中に身を投げて死についに二つの鉄塊と化した。役人はこれを聞いてその父を釈放し、二人の娘を憫んで廟を立てて娘を祀つたという。

現在の寺の建物は清の終わりに建てられたものである。寺は北を背にし南を向いており、山門は煉瓦で造られ、その上には「鉄女古寺」と書かれた匾額がある。寺の中には二つの殿があり、前にあるのが韋駄殿、後ろにあるのが大雄宝殿である。その中には一人の鉄女が祀られているが、一人の尊像の高さは一・三七メートル、他の一人の高さは〇・九メートルである。細かにこの像を見ると、弱々しく

重なりあつて見え、かすかに血痕の跡がわかるといわれる。なお大雄宝殿の中には明代のものといわれる三世仏が祀られている。二女の尊像は、十八羅漢の背後にある。左側が十四歳の娘で、右側が十六歳の娘であるという。唐の貞觀三年（六二九）に造られたといわれるが確かにことは不明である。

万寿宝塔

万寿宝塔は湖北省沙市市の南の荊江大堤の長江に面した川岸にある。この塔は明の遼王朱憲燁が太妃毛氏の命令によつて、嘉靖帝のために祈禱して造営したものである。嘉靖二十七年（一五四八）に着工し、三十一年に完成した。

煉瓦を積み重ねて築造されており、八角七層の塔で高さは四〇メートル余り、下には大きな石座が設けられ、額、枋、斗栱は皆な木造建築の形式をそなえ、塔身の外壁の各層には漢白玉で雕刻された仏像が飾られている。それらは、全部で九十四龕あり、その造型はすばらしい。

内外の壁の間には、大量の磚雕の仏像がはめこめられ、仏像は端座したり、肅然として立つていたり、それぞれ独

特の風格を表している。頂上には銅鑄鎏金の塔刹がそなえつけられ、その表面には『金剛經』の全文が刻されている。

第一層の正門から塔室に入つて最上層に昇り、欄干によりかかるて荊州城や沙州城眺めると、町が整然と整い、長江が帶のように横たわっているのが見える。西にある虎渡の河口を眺めると、大きな水門が長江をおさえつけ、白い帆が片々として見え、「虎渡晴帆」といわれる名勝を見ることができる。

四 当陽県

玉泉寺

玉泉寺は湖北省当陽県城の西十五キロの玉泉山の麓にある。玉泉山という名は、山間に珍珠玉泉があるために玉泉山と呼ばれ、また山の形が船をさかさにしたようにみえるので覆船山とも呼ばれた。その山は超然と屹立し、その勢いは雄々しくて、珍しい洞窟や怪石があり、谷は深く、溪流が曲がりくねつて流れ、珍しい鳥がたくさんに栖み、まさしく佳境の名をほしいままにしている。

この玉泉山はもともと「三楚の名山」という名声があつ

た。唐代の詩人、張九齡はつぎのような詩を詠んだ。

万木柔かに結ぶべく
千花敷いて欲然たり

松間に好鳥鳴き

竹下に清泉流る

石壁、精舎を開き

金光、法筵を照らす

この詩は詳しく山の優れていることを絵のように描き出している。天下の叢林の四絶（四つの優れた寺）の一つである玉泉寺は、この山の東麓にある。

寺は山の名により、東漢の建安年間（一九六—二二〇）

に、普淨和尚が始めてここに草庵を結んだ。その後、梁の宣帝（五六九—五八二）が勅命によつて覆船山寺を建てた。隋の開皇の始め（五八〇年代）、晋王広が天台智者大師をこの地に招いて寺院を拡大し教えを広めた。

天台大師は山水を愛し、この地に寺を三十六建て、八万体の仏像を造像したといふ。ここに至つて浙江省の天台山国清寺、江蘇省南京の栖霞寺、山東省長清の靈巖寺とともに天下の叢林四絶とか、天下の四大叢林と呼ばれたり、さ

らに中国仏教の四大名刹ともいわれた。

唐の貞觀年間（六一七—六四九）、僧法瑱が寺を増建し、その後、北宗禪の神秀（六〇六—七〇六。俗姓は李、河南省開封市の人、幼年に出家す）が五祖弘忍の衣鉢を受け、禪宗の北宗を創めた。

宋の天禧（一〇一七—一〇二〇）末年、明肅皇后が寺を

拡大し、また額を「景德禪寺」と改めた。その規模は占有地は左右五里、前後十里に達した。塔は九、仏殿は十八、僧舎は三千七百に達したという。荊州と楚州の叢林の冠といわれた。元、明、清の歴代にわたって何回も修理された

という。

現存する主な殿堂としては、天王殿、大雄宝殿、毘盧殿、その上方に藏經樓、東堂、西堂、般舟堂などがあり、その多くは清代に建てられたものである。

その中でも大雄宝殿がもっとも大きく、幅七間あり、重檐、歇山式の屋根をもち、高さは二メートル、内外に七本の柱が立ち、全て楠木でできている。柱はまわりが二・二メートル、梁架と斗拱の用材も大きく、天井の藻井には花が描かれて、彩^{いろどり}が美しい。何代かにわたって修理さ

れたが、今なお宋代建築の特色と風貌を残している。大雄宝殿の中央には「智者道場」と書かれた匾額がかかげられている。智者というのは天台大師のことであるから、この玉泉寺が天台大師が開いた修禪道場であつたことがわかる。大雄宝殿の中央には、釈迦仏、阿彌陀仏、藥師如來、觀音菩薩が祀られている。

その他の殿堂樓閣の形は素朴であり、その技法も統一され、裝飾は多彩であり、三楚地方の古い建築の特色をよく現わしているといわれる。

大雄宝殿の前に蓮池がある。紫の蓮の花が美しい。蓮池の左右には講經堂、伽藍堂、禪院が連なつており、蓮池を通り過ぎると、天王殿があり、天王殿の左右には、神道門、坤道門の二門がある。天王殿の背後には毘盧殿がある。その殿の前の庭のそばに、石刻の觀音像碑があつたといいう。ここに描かれた觀音の画像は筆力が力強く、その線は流暢であり、唐代の大画家吳道子の絵であるといわれている。現在では、この石刻觀音像碑は、觀音閣の中におさめられている。觀音閣の中には、赤い布切れがあり、それには「觀音靈感、有求必應」と書かれていた。

大雄宝殿の前庭には、このほか、隋の重さ一・五屯の鉄鍋や、宋代の鉄製の大鐘、元代の鉄斧などがある。隋代の鉄鍋は隋の大業十一年に造られたもので、次のような文字が彫られている。

隋大業十一年歲次凡亥十一月十八日

當陽県令李慧達建造鑊一□用鐵今

称（料）三千斤永充玉泉道場供養

これによると、鉄三千斤を用いて、當陽県令李慧達がこの鉄鍋を造ったことがわかる。この鉄鍋は玉泉寺に供養として寄進されたものである。現存している寺院に寄進された中国の鉄鍋の中でももつとも古いものの一つである。鉄鍋はたくさんの粥を作つて信者に供養するために造られたのである。

境内には明代の古柏や銀杏が天をおおい地にわだかまり、枝葉を繁茂させている。さらに、一つの茎からたくさんの花を咲かせる蓮花が色鮮やかに咲きほこり、よい香りを放っている。この放生池にある蓮花は毎年八月に開花するといわれている。

この放生池の側には羅漢堂がある。この堂の中には五百

羅漢がある。また毘盧殿があり、毘盧遮那仏が祀られている。千手觀音が祀られている觀音殿もある。この觀音殿の右端には濟公が祀られている。濟公は宋代の禪僧であるが、日本の一休禪師と同じように民衆に人気があり、中国の羅漢堂にも祀られていることがある。なおこの觀音殿には、明の憨山大師の「醒生歌」がはりつけられていた。

また放生池の側の関羽殿には関羽が祀られており、清の同治十一年に造られた小鐘が置かれている。

寺の周りには名勝古跡が甚だ多いが、もつとも有名なのは古代建築の明珠といわれる玉泉寺鉄塔、または稜金鉄塔といわれる如来舍利宝塔である。この鉄塔は、北宋の嘉祐六年（一〇六二）に建てられたもので、塔の基壇は煉瓦造りで、塔身は鉄で铸造され重さは五三・三屯あり、八角十三層の塔で高さは一七・九メートルある。第二層は須弥座で、各層の各面には皆な同じく「八仙過海」「三龍戲珠」と、海山、水波、海藻などの花紋の図案があり、その線は流れるようにならしてある。八角形の台座には塔を支える力士が一体ずつ铸造されているが、それぞれの力士は全身に甲冑をつけ、脚は山を踏みつけ、塔座の頂きを撫ぜている。

その姿態は剛健であり、威武はあたりをはらつてゐる。

塔面の表面は木造樓閣式の建築の造型にならつて、各層には四門があり、それは各層ごとに交互にあり、その他の四面には仏像が雕造されているが、その形態はそれぞれ異なつてゐる。一〇四の風鈴が各角のひさしの下に下げられている。塔の形体は纖細、穩健であり、優雅である。塔身が夕日に照らされると何時も、紫色の氣と金の霞が互いに照り映え、「鉄塔稜金」の珍しい景観を呈するという。

玉泉寺の左の方角にある翠寒山の下には、三国時代、蜀の將軍関羽が、死後、靈を顯わした場所と伝えられている処がある。伝説によると関羽が荊州を失い逃げたが、首と体が別々になつてから、なお赤兎馬に跨がつてここに頭を落とし普淨禪師に向かつて大声で叫んだといふ。「俺の頭がやつて來た！」と。その後、劉備は普淨禪師の請求に答えて、山の上に顯烈祠を建てたが、今に至るまで山の下にはなお馬をつなぐ杭がある。

杭の側の溪流に臨んで泉がある。それが玉泉である。泉水は山の麓から湧きだし、その清らかで碧色の水は玉のようであり、その泡は珠が連なつてゐるように見える。その

ため玉泉と名づけられたといわれる。

宋代の蘇雨は「漱玉噴珠」と題し、明の袁宏道は「珠泉跳玉」と称した。遊覧客が泉の岸にたつて静かに見ると、池の水は静まりかえり、泡珠がゆるやかに湧き出でてゐるが、手をたたいたり土を強くふみつけたりすると泉が沸きたち、連なつた珠が競つて湧き出て、いわゆる「泉清珠錯落、泉沸珠盤旋」（泉が清ければ珠は乱れていて、泉が沸きたつと珠は旋回する）、また「游人一擊掌、疊々如貫珠（遊覧客が一たび手をたたくと、連なり重なること珠を通したようである）と言われるのは、皆な事實の通りの言葉であり、けつして誇張した表現ではないのである。

池の右側の山麓に一本の方形の石柱が立つており、その石柱には「漢雲長顯靈処」と書かれている。この石柱は明の万曆年間に立てられたもので、その石柱の頂きには石の獅子がうずくまり、その姿は生き生きとしている。泉には珍珠橋がかけられているが、それは解放後に増築されたものである。珠泉に虹が影をおとし、青い水と青い空が互いに照り映えて、その景色はすばらしいものがある。

らに田畠の中を左折して野道をしばらく行くと度門寺址に出る。度門寺は北宗の神秀が住した寺である。『宋高僧伝』卷八の神秀伝はつぎのように記している。

則天武后これを聞き、召して都に赴かしむ。肩輿もて殿に上らしめて親しく跪札を加え、内道場にてその供施を豊かにし、時々に道を問う。勅して昔、住せし山に度門寺を置いて、以てその徳を旌す。時に王公已下、京邑の士庶、競い至つて礼謁し、塵を臨んで拝伏すること、日に万計あり。

武后が神秀を内道場に招いて問法したり、度門寺を建立したりしたことが明らかである。

菜の花が咲く田園の片隅にある度門寺址は現在、小学校として利用されていた。建物の中には、「度門寺置田記」の碑刻があつた。小学校の横は茶畠になつており、まことにのどかな場所である。

梁父岩、抱膝石などの名勝古迹がある。

武候祠の右前方に石碑坊がある。額には「古隆中」の三字が刻されている。石柱の上には「三顧頻煩天下計、兩朝開濟老臣心」という対聯が雕られている。草廬亭の下には、明の嘉靖十九年（一五四〇）に建てられた石碑があり、碑身には「草廬」の二字が大書されている。

三顧堂の両側にある碑廊には諸葛亮の遺作の一部である「降中對」「梁父吟」「出師表」などの石刻や有名な人の題詩や題記などがはめこまれている。四周は群山にとり囲まれ、松柏が天空に聳え、溪流がめぐり、すばらしい風景で

ある。三国時代、諸葛亮が住んでいたところである。諸葛亮（一八一一三四）は字は孔明、山東省琅琊郡（山東省沂南県の南）の人である。十七歳の時、叔父の諸葛玄に従つて襄陽に来て古隆中に隠居し、自ら耕し書を読み、世の中のことにも意を留めていたため臥龍と称せられた。

唐代に武候廟が建てられ、その後、しばしば再建されたり壊されたりした。現存している建物は三顧堂、武候祠、三義殿、草廬亭、抱膝亭、六角井、野雲庵などの清代の建築物である。そのほか躬耕田、小虹橋、半月渓、老竜洞、

五 襄樊市

古隆中

古隆中は湖北省襄樊市襄陽城西一五キロの隆中山の東に

ある。

も珍しい芸術作品の一つといわれている。

緑影壁

湖北省襄樊市襄陽城の東南の隅にある。それは商店街の中にある。すべて青緑石の煉瓦を積み重ねてできている照壁なのでこの名がある。

明の正統元年（一四三六）、襄王朱瞻墡が長沙よりこの地に移封して、大いに土木を興し、宮室を造営した時、この壁は王府の前に造られた照壁として造営されたのである。崇禎十四年（一六四一）、王府が全部壊され、ただ照壁だけが現在まで保存されているのである。

緑影壁の高さは約七メートル、幅二五メートル、厚さ一・六メートル、木造の構造を模したものであり、頂上は廡殿式で、その表面は三間の広さがあり、すべて漢白玉がはめこまれている。真ん中には二龍戲珠が刻され、その左右には、「海水流雲」の間に巨大な竜が舞つている姿が刻されている。かまちには九十九の小竜が精緻に雕られていて、その姿態は見事なもので雕刻は優美であり、風格は豪放、生き生きと躍動している。この緑影壁は石刻の中でも

広徳寺

もとの名を雲居寺という。湖北省襄陽県の西約十三キロにある。畠の中を少し入ると看板が見える。この寺は漢唐以来の古刹であり、唐の詩人皮日休は、かつて「雲居寺玄福上人の旧居を討ぬ」という詩を詠んだが、その中で当時の雲居寺の風景を述べている。

明の景泰年間に再建されてから広徳寺と改められた。現存している建物は文革直後は大殿と大殿の背後に有多宝塔であったが、現在は鐘楼、鼓楼、山門、天王門、藏經樓などが再建され七堂伽藍を備えた立派な寺になっている。大雄殿の前には、「聖旨」と書かれた成化十八年三月初出日に立てられた石碑がある。

大殿は单檐、硬山式の建物で清代に重修されたものである。

多宝塔は明の弘治七年（一四九四）から九年の間に建てられたもので、煉瓦造りで木造建築の構造をまねたもので高さは一七メートル、その基層の塔室は八方形であり、

上には浅いひさしが重なり、下には小さな基壇が置かれており、煉瓦造りの角柱、螭首がついた石雕、四面の石と煉瓦を積んだ卷門があり、正門の上には「多宝仏塔」の四字が刻された石額がある。その上には五つの塔がそそり立っている。五塔の中央にあるのは喇嘛塔であり、四隅にあるのは六角亭式塔であり、皆雕刻された精細な石座の上に置かれている。

台座および小塔の外壁には、すべて石雕の仏龕がはめられており、ひとつひとつ仏龕には一体の石仏が供されていて、その石仏は秀逸である。その塔体の造型は卓抜した特別な風格を具えている。特異な形態に驚かされる。

鹿門山

旧名は蘇嶺山、湖北省襄陽県の東南二〇キロにある。北は壩山に接している。郊外をバスで進むとやがて山地に入り、バスが停まつたところが鹿門山の入り口である。山々は青々とした峭壁のように見え、烟霧に浮かぶかのような木々の茂みと幽邃な景色に魅せられる。

東漢の建武年間（二五—五六）、蘇嶺山の山上に神祠が

建てられ、その門前には二つの石鹿が刻された。人々は鹿門廟と呼んだので鹿門山という名がついたのである。

西晋の時代に鹿門寺は万寿寺と改称されたが、唐代には再び鹿門寺と呼ばれ、宋代には最も栄え、仏殿、僧寮、斎堂、方丈などあわせて五百間余りであったという。

漢の終わりには、龐徳公、唐代には孟浩然と皮日休などがこの山に隠棲していた。明代以前に建てられたのは龐公祠であり、その中には龐徳公の像が供えられ、明の嘉靖四年（一五二五）、神祠が建てられ、龐徳公と孟浩然と皮日休があわせて祀られたので三高祠と呼ばれた。明末に毀されて現存しているのは大殿、仏堂、寮房、斎舍などであるがすべて清末の建築である。石の鹿が一頭だけ現存しているが、それも清末の作品であるという。

寺の後には靈泉があふれ、まるで空から落ちる瀑布のように水が流れ、その形態は珠すだれのようであり、その下の石畳の池に落下しているため瀑雨池と呼ばれている。泉水はあふれるばかりに池の中にそそぎ、石雕の龍の口から噴出し、一年中、その水が尽きることがないという。

寺内には、宋代に刻された塔記や明清の石碑などが現存

し、それには鹿門寺の高僧の事跡や寺の興廢の一部始終が記されている。

この鹿門山には多くの中国人の観光客がいた。ここは鹿

門寺國家森林公園となつてゐるからである。

鹿門寺には多くの碑刻が現存している。その一、三をあげると次の如くである。

重修鹿門三高祠記

大明正徳十一年碑

鹿門息波禪師碑

続修鹿門供養人名碑

功德無量碑

共結善縁碑

鹿門山碑

重建鹿門碑

ちなみに『湖北金石志』の中に、「鹿門燈禪師塔銘」が

収録されている。

六 隨州市

大洪山

湖北省隨州市の西南に大洪山という山がある。涢山ともいい、長さは一五〇キロにも達する。漢江とその支流の涢水の分水嶺である。海拔は五〇〇メートル前後であるが、主峰は一〇五五メートルある。現在は全国重點風景名勝区になつてゐる。

襄樊市を出発した車は棗陽市を通りやがて洪山鎮に着く。洪山鎮からさらに進み右折して山道に入る。山道は延々と連なり車はあえぎながら進む。下を見るとどこまでも山々が連なつてゐる中に、ところどころ菜の花の咲いた畑が見える。頂上近くに登りきると山桜が咲いているのが鮮やかであつた。頂上近くの鞍部を通過すると下は千仞の谷であつた。七曲がりの山道を下りきると静かな農村が視界に入る。そこが洪山寺のあるところである。洪山寺は元は山頂近くにあつたらしいが、現在はこの谷間にある。

道の左に大銀杏が目につく。この大銀杏から左へ入ると洪山寺である。右の方向へ進むと磚塔と墓塔林が見える。

湖北省仏教寺院訪問記（鎌田）

磚塔は五層密檐式の塔で基壇の上に五層になつてゐる。第二層より上の各層には仏龕が雕られており、かつてはそこに仏像があつたことがわかる。第二層に「大明天順七年」と刻された碑刻がある。墓塔林には二つの石碑が立つており、左の碑には「大洪山賢禪師塔銘」とあり「大明成化竜集丙申歲」と記されていた。右の碑の表には「洪山諦忍禪師塔銘」とあり、裏面には「体認禪師垂誠碑記」と記されていた。六つの墓塔の中で塔名が読みとれるのは次の四つの文字である。

- (1) 前臨濟正宗体認慈禪師靈塔
裏面 万寿禪院合家碑叙
大清道光四年歲次甲申三月中完
- (2) 第二代住持道庵裕和尚塔
裏面 大宋隨州大洪山靈峰禪寺記
大洪山預禪師塔銘
鄧珣武書
- (3) 重門山第二代住持□公□□和尚塔
裏面 鄭故隨州大洪山十方崇寧保壽禪院第一代住持恩禪師塔銘
范域撰
- 清成化十三年
- (4) 了空之塔銘
裏面 功德碑
崇寧万寿禪寺了庵明禪師重建寺記碑
鄧文原撰
- 隨州大洪山十方崇寧保壽禪院第四代住持湧禪師塔銘
韓韶撰 韓皓書
- なお『湖北金石志』には、
大洪山慈忍靈濟大師碑 楊傑選
大洪山靈峰禪寺十方記 張商英撰

洪山寺招待所の前を通り少し行くと、大洪山寺の門前に出られる。ここは長岡鎮縁木村である。この門前に宋代の碑刻が三石、元代のものが一石、清代のものが一石ある。これは次のものである。

聖諭 嘉慶九年四月十五日給發

大宋隨州大洪山靈峰禪寺記

崇寧元年正月上元日 張商英撰

などを始め、現存している碑文も収録されているので、これらを比較しながら碑刻の本文を検討し、資料的価値を高める必要があるが、今回はただ大洪山を訪問しただけであるので他日を期したいと思う。

周知のように大洪山には、曹洞宗の投子義青の法嗣、大洪報恩、法恩の法嗣、大洪守遂、守遂の法嗣、慶顕、丹霞子淳の法嗣、慶預などが大洪寺に住した曹洞宗の名刹である。大洪報恩（一〇五八一一一二）は北宋の人、投子義青に参じて心要を得た。少林寺に住したが、大洪山崇寧保寿禪院に招請され、律院を禪院に改め、大洪山の第一世となつた人である。無尽居士張商英との親しい交流が有名である。

大洪守遂（一〇七二一一四七）は二七歳出家し、始め玉泉勲に参じ、後、大洪報恩に参じて法を嗣いだ。金の進入によつて難を避けて南方に移つたが、紹興五年、再び大洪山にもどつた。七百人の大衆を擁し、雲濟道場を復興した人である。大洪山遂禪師塔銘がある。

守遂の法嗣、慶顕は出家して宏智正覚に参じ、ついで大洪守遂に参じて大悟した。大洪山に住して宗風を挙揚、二百余人の弟子を輩出させた。明悟大師塔銘がある（『湖北金石志』卷十二所收）。

大洪山慶預（一〇七八一一四〇）は芙蓉道楷、丹霞子淳に参じた。政和七年（一一一七）、水南（湖北省）興国寺で開堂、その後、大洪山に住し、さらに雪峰山に住した。塔銘は隨州大洪山第六代住持慧照禪師塔銘（『湖北金石志』卷十一）である。

芙蓉道楷（一〇四三一一一八）は、投子山の投子義青の下に大悟した。沂州仙洞山、郢州（湖北省）の大陽山などを歴住し、崇寧二年（一一〇三）、大洪山崇寧保寿禪院の第二世の住持となつた。弟子に丹霞子淳がある。王彬選「鹿門法燈塔銘」（『湖北金石志』卷十）がある。

丹霞子淳（一〇六四一一一七）は大陽山の道楷に参じ印可を受け、南陽の丹霞山に住し、後に大洪山に住した。「淳禪師塔銘並序」（『湖北金石志』卷十）がある。

現在の大洪寺は山麓の村に移されているが、文革時に破壊され、現在は小さな大殿と觀音殿があるにすぎないが、

湖北省仏教寺院訪問記（鎌田）

一九七〇年生の妙微法師が復興への情熱をもやしておられた。大殿の前庭において五、六人の僧や信者と繞行看経しておられたのが印象的であった。